

Water

吉田修一

長崎市内の高校に通う凌雲は、同じ高校の水泳部キャプテンだった兄の雄大を半年前に交通事故で亡してしまった。兄の死で深く傷ついた母や苦労を重ねる父、さすがに卒業後の進路や異性のことなどで凌雲は揺れていた。そんななか、かつての兄と同じように水泳部のキャプテンとして高校生活最後となる大会に臨むことになった。

県大会の三日前になつて、急に落ち着かなくなつた。落ち着かなくなつたというよりも、何に対してももぐらしていた。たとえば、部員たちの集合が遅いだとか、練習中に無駄口が多いだとか、そういう今までなら気にもならなかつたことがボクを悩まし、まるで愚かな群衆の前に立ち、必死に革命を唱える指導者のように、一人無様だった。

部員たちはそんなキャプテンを完全に無視し、今まで通り好き勝手にやっていた。春気な下級生たちは、触らぬ神に祟りなし、と近寄ろうともしない。

番に向かって、思い思いの格好で走り出そうとしていたのだ。

大会の前夜、配達が終わつて、親父と二人晩飯を喰つていると、親父が力尽きたような声で、「もう駄目かもしれない」と呟いた。

ボクはただ「……うん」と答えるしかなかつた。親父が何を言いたいのか、もう分かつていて。

「もう店にも立たせられんもんなあ……」

今日の午後、あるお客様が店番をしていた母に「息子さんは氣の毒やつたねえ」と言つたらしい。なんてねえ」と言つた。母は近くにあつた簞を持ち上げ、そのお客様の体を癒ができるまで殴り続けたらしい。幸いそのお客様がいい人で、何もなかつたことにしてくれたのだが、驚いた父は母を二階の部屋に監禁してしまつた。

母は今も鍵のかかった二階の部屋で、時々大声で喰んでいる。親父は母を病院に入れることを決心したのだ。

浩介や、圭一郎や、そして拓次も、ボクの癪を気にしている暇などないと見えて、遅くまでターンや飛び込みの練習をして、自分勝手に気分を昂揚させていた。

結局気づかなかつただけで、部内の緊張は最高潮に達していたのだ。ただ盛り上がり方が違うだけで、ボクたちに見えるものは、三日後に行われる大会の電光掲示板だけだった。朝、目が覚めて、夜、目を閉じるまで、一秒たりとも泳いでいる姿を想像していない瞬間はなかつた。ボクらは三日後に迫つた本

A
皿を洗つて、二階へ上がつた。鍵をあけ、そとドアを開けた。床に敷かれた布団から母の乱れた髪だけが見えた。布団を被つたまま、母は喋り続けていた。

「あの馬鹿が、雄大が死んだなんて言うけん。私が呼んで叫いてやつたよ。あの馬鹿が雄大が死んだなんて言うけん。本当に呆れたもんねえ、人の息子を勝手に死んだと思うと」

布団の中に籠る母の声を聞きながら、そつとドアを閉め、震える指で鍵をかけた。そして「明日から試合、がんばつてくるけんねえ」と心の中で呟いた。

「あの馬鹿が、雄大が死んだなんて言うけん。私が呼んで叫いてやつたよ。あの馬鹿が雄大が死んだなんて言うけん。本当に呆れたもんねえ、人の息子を勝手に死んだと思うと」

布団の中に籠る母の声を聞きながら、そつとドアを閉め、震える指で鍵をかけた。そして「明日から試合、がんばつてくるけんねえ」と心の中で呟いた。

「えーっ、行進? そんなの格好悪いですよおー」「やかましーとにかく一列で行進して入るーみんな胸を張つて歩け! そして各自この会場を出るときのことを考えながら歩け! よかやー会場を出るとき胸を張つて歩いて帰る自分の姿を想像して歩けー 分かったか!」

「はーい」

高鳴る胸の鼓動を必死に抑えながら、みんなの先頭に立つた。後ろに並んだ浩介が、「なんの呪いや?」と冷やかす声を無視して、胸を張つて歩き出した。

バラバラに会場入りしている他校の選手たちが、立ち止まつてボクらの行進を眺めている。指をさして笑つている者もいれば、露骨に嫌な顔をしている者もある。後ろに並んだみんなのことが気になつて振り返つたが、部員たちはそんな中傷や揶揄に怯んでいる様子はない。京子も、浩介も、拓次も、圭一郎も、

大会初日。日差しだけが夏の衣をつけ、汗や風は秋の匂いがした。水泳競技は四日をかけて競われる。前半二日は男女の予選が行われ、三日目に女子の決勝、そして最終日、泣いても笑つてもボクたちの運命が決まる、男子決勝。

貸切りバスが会場に着くと、ボクは部員全員を集合させた。お揃いの紺色のジャージを着た部員たち

そしてあとに続く下級生たちも、みんな自信に満ちた顔でついてきていた。

百米バタフライに出場した美穂が泳法違反で失格になつたことを除いては、女子の予選は頗る順調だつた。中でもなんと京子が予選を一位で通過した。予選から全力で四百米自由形を泳ぐ選手などそういうのも確かだが、初めて最後まで誰にも抜かれなかつた京子を応援しながら、ボクは体が熱くなつた。

大会第一日目の女子の予選が終つた時点では、我が部の意気は立ち昇る虹のよう、大空に突き刺さる勢いだった。

二日目、男子の予選が行われ、浩介も拓次も圭一郎も、順調に決勝に残つた。残念ながら、彼らと同じ種目で出ていた下級生たちは誰も決勝には残れなかつたが、みんながみんな自己最高記録を出して泳いだ。

ボクの名前は凌雲といふ、雲を凌ぐと書く。ボクには追い越さなければならない雲がある。夏空に浮かぶ雄大雲や、強く誇らしげな入道雲を。

二日目の最終種目、百米自由形の予選が始まつた。この種目にエントリーしているのは、ボクと二年の原田、そして一年の省吾の三人だ。登録記録の速い

が、緊張した面持ちで一列に並んだ。

「よかやー 今から会場に入るわけやけど、一列になつて行進して行くぞー」

「えーっ、行進? そんなの格好悪いですよおー」「やかましーとにかく一列で行進して入るーみんな胸を張つて歩け! そして各自この会場を出るときのことを考えながら歩け! よかやー会場を出るとき胸を張つて歩いて帰る自分の姿を想像して歩けー 分かったか!」

「はーい」

高鳴る胸の鼓動を必死に抑えながら、みんなの先頭に立つた。後ろに並んだ浩介が、「なんの呪いや?」と冷やかす声を無視して、胸を張つて歩き出した。

バラバラに会場入りしている他校の選手たちが、立ち止まつてボクらの行進を眺めている。指をさして笑つている者もいれば、露骨に嫌な顔をしている者もある。後ろに並んだみんなのことが気になつて振り返つたが、部員たちはそんな中傷や揶揄に怯んでいる様子はない。京子も、浩介も、拓次も、圭一郎も、

いの中でも、原田のふざけた態度が、より目立つてい
る。

「原田一 バク転しろー」

ニヤツと笑い、スタート台の上から空中で一回転してブールに落ちた。観客席から大きな笑い声が沸き上がった。

「すいませーん。まさか本当にやるとは思わなかつ
されてるようだつた。声をかけたボクのところに
もすぐに監視員が現れ、冷たく注意されてしまつた。

怒られているボクを見ながら、隣で省吾が必死に

「なあ、省吾。今日の夜までには100メートル泳ぎ終われよ。朝までは待てんぞ」
「一人だけ遅かったら、みんなに笑われるやうなあ」
「大丈夫、大丈夫。お前がゴールするころには、みんなこの会場から帰つとる」

情が無い。一言で言つてしまえば、ブールは男らしくない。そして何より押しつけがましくないのだ。清潔で、淡白で、そして危険のないブールがボクには合っているようだ。

ホイップルが鳴つた。スタート台に立つと、時々こんなことを思う。

「なんでもそなたが、何かを始めるときの自分が

卷之三

「位置について」用意一
「何かを始めるときの自分が、一番臆病おくびょうで、そして
一番勇敢だ」

最高のスタートを切つて水中に飛び込んだ。手のひらが水を握^{つか}んでいる確かな手応えがある。体が水に乗つてゐる確かな感触がある。

50メートルのターンを切つたところで有り余る力を感じた。先頭を泳いでいるのは確

「もう、少しは励まして下さいよお」
ブールでは原田が泳ぎ終わつたようだつた。テン
トからはブールの中の様子が見えない。電光掲示板
に表示された原田の記録を見ると、残念ながら決勝
には残れそうになかった。
「さあー 第三レースの選手は位置についてー」
係員の声に、ボクと省吾は勢いよく立ち上がつた。
他の選手と並んでスタート台に向かうとき、泳ぎ終
わりテントに戻つていた聖マリの田島が「がんばれ
よー」と声をかけた。ボクは片手を上げてそれに応
えた。
選手紹介が終わり、スタート台に立つた。予選だ
ということもあり、それほど緊張はしていない。そ
れより一番端のコースに立つている省吾のことが少
し気になる。
スタート台から眺めるブールの景色は絶品だ。風
が作る小さな波に太陽が反射している。ボクはブー
ルが好きだ。たぶん海よりも好きだ。ブールには海
が持つてゐるような獣猛なモラルだとか、荒々しい
かだつた。勢い余つて、今にも体が水面から飛び上
がりそうな気さえする。
壁に激突する勢いでゴールし、振り返つて電光掲
示板を見ると、一番上にボクのタイムがある。
観客席からみんなの歓声が聞こえた。56秒99。
とうとうボクは、57秒の壁を破つた。聖マリの田
島の記録には及ばなかつたが、予選を二位で通過す
ることになつた。
ちょうどそのとき、観客席から笑い声が起つた。
咄嗟に省吾のコースへ目を向けると、やつとターン
を終えた省吾が、ほとんど溺れてゐるように泳いで
くるのが見えた。
ボクは慌ててブールを飛び出し、省吾のコースへ
と駆け寄つた。
「泳ぎ終わった人はテントに戻つてー」
注意する係員の手を払いのけ、大声で省吾に叫ん
だ。
「来いー ここまで来いー」

「さあー 第三レースの選手は位置についてー」
係員の声に、ボクと省吾は勢いよく立ち上がった。
他の選手と並んでスタート台に向かうとき、泳ぎ終
わりテントに戻っていた聖マリの田島が「がんばれ
よー」と声をかけた。ボクは片手を上げてそれに応
えた。

選手紹介が終わり、スタート台に立った。予選だということもあり、それほど緊張はしていない。それより一番端のコースに立っている省吾のことが少し気になる。

スタート台から眺めるプールの景色は絶品だ。風が作る小さな波に太陽が反射している。ボクはブルが好きだ。たぶん海よりも好きだ。プールには海が持っているような獰猛なモラルとか、荒々しい

人残らず蹴飛ばしてやるー 来いー ここまで来
いー

吉田修一 昭和四十三年（一九六八）～長崎市生まれ。小説家。高校卒業まで長崎市内で過ごし上京。平成四年（一〇〇二）「バークライフ」で第二二七回芥川賞受賞。主な作品に「最後の息子」「悪人」「バーード」などがある。

◆キヤブテンとして大会に臨む凌雲の心情の変化に対して、兄や両親がどのような影響を与えているか、考えてみよう。さらに省吾の懸命な泳ぎに対しても凌雲は何を感じていいか、考えてみよう。

吉田修一 昭和四三年（一九六八）～長崎市生まれ。小説家。高校卒業まで長崎市内で過ごし上京。平成四年（一九〇二）「バークライフ」で第一二七回芥川賞受賞。主な作品に『最後の恩子』『悪人』『バレー』などがある。

観客席での笑い声が、沈黙へと変わった。ボクの手を引っ張っていた係員の手に力が入るのが分かった。水から上がる省吾の顔が、苦痛と希望とでぐるぐると浮かんでいた。

あと10メートル。ボクは目を瞑つた。

観客席から秋風のような拍手が聞こえる。ゆっくりと目を開け、プールの中を覗き込むと、省吾の顔があった。生まれて初めて100メートルを泳ぎ切った男の顔が、そこにはあった。

息もできぬほど苦しいのだろう、声も出せずに「凌雲先輩」と口が動いた。^{おじさん}「ようやく」「最後まで泳いだよ」と省吾が言った。

ボクは泣くもんか、と思つたけど涙が流れ止まらなかつた。

三浦一とん「風が強く吹いている」

アプローチ

「どうだい、竹青莊は。今年は部屋が埋まりそうかい」「あとひとつなんですが、どうでしょうね」「埋まるといいねえ」「はい」

環状八号線から、外側に向かって歩いて二十分ほどしか離れていないこの土地でも、夜になると空気は澄みわたる。天気のいい日の昼間には、ショッチャう光化学スマッグの注意アナウンスが流れるのが嘘のようだ。小さな一軒家の建ち並ぶ住宅街は街灯もまばらで、ひそりと静まり返っている。

一方通行の入り組んだ狭い道をたどりながら、清瀬灰二是空を見上げた。彼の故郷、島根の星空とは比べるべくもないが、それでもたしかに、細かい光の粒がそこにはあった。流れ星でもあればいい。そう思っても、空は静かなままだ。

首もとを風が吹き抜けていく。もうすぐ四月になろうとしているが、夜はまだ寒い。

行きつけの銭湯「鶴の湯」の煙突が、家々の低い屋根の向こうに浮かびあがる。

清瀬は空を眺めるのをやめ、羽織っていたドテラの襟に顎を埋めるようにして足を速めた。

東京の銭湯の湯はどうにも熱い。この日も、清瀬は体を洗ったあとに浴槽に身をひいたが、たまらずすぐに立ちあがった。「鶴の湯」の常連である左官屋のオヤジが、そんな清瀬を見て洗い場で笑った。

「あいかわらず瞬間入浴だな、ハイジ」

せっかく料金を払ったのに、このまま出るのは寂だ。清瀬は再び、洗い場のプラスチックの椅子に腰をかけた。鏡を覗きこみ、持参した剃刀で髭を剃る。左官屋は清瀬の後ろを悠々とよぎり、うなり声を上げながら浴槽に浸かった。

「江戸っ子は昔からなあ、風呂の温度は、湯がケツに囁みつくぐらいがちょうどいい、つてんだよ」

左官屋の声が、天井の高いスタイル張りの空間に響く。女湯からはひとの気配がない。番台では銭湯の主が、先ほどから暇そうに鼻毛を抜いている。どうやら客は清瀬と左官屋の二人だけのようだった。

「その言葉、うまいこと言うなといつも思いはするんですが、ひとつ疑問が」「なんだい」

「ここは下町じゃありません。山の手です」

清瀬は髪を剃り終わり、また浴槽に近づいた。左官屋を視線で牽制しつつ、蛇口をひねって熱湯に水を注入する。温度のちがう液体が、ゆらぎながら混ざりあっていく。それを確認し、清瀬は浴槽に身を沈めた。蛇口のそばに陣取り、安全な温度になった湯のなかで脚をのばす。

「下町と山の手の区別がつくようになるとは、あんたもずいぶん、こっちの暮らしに慣れたもんだね」

左官屋は蛇口の奪還を諦めたようだ。ぬるくなっていく湯を避け、清瀬の対角線上にあたる位置まで移動した。

「もう四年目になりますから」

本当に、と清瀬は思った。これが最後の年だ。そして最大のチャンスがまわってきている。あと一人。湯をすくい、両手で顔をこする。どうしてもあと一人必要だ。

剃刀に負けたのか、ちりちりと頬に湯がしみた。

清瀬は左官屋と連れ立って銭湯を出た。自転車を引く左官屋と、のんびりと夜道を歩く。熱い湯のおかげで、寒さはまったく感じない。羽織ったドテラを脱ごうかどうかどうしようか、清瀬が思案していたそのとき、背後から入り乱れた足音と怒声が遠く聞こえてきた。

振り返ると、細い道の彼方に男の人影が二つあった。

なにごとかを叫ぶ男を振り切るようにして、もう一人の男が正確なストロークでこちらに向かって走ってくる。その男はみるとうちに清瀬と左官屋に迫り、若い男だ、と清瀬が認めたときには、すぐ脇を通りぬけて走り去っていった。そのあとをかなり遅れて、コンビニのエプロンをつけた男が追いかけていく。

清瀬の肩をかすめた若い男に、息の乱れはまったくなかった。清瀬は思わず、あとを追つて走りだそうとしたが、左官屋の非難のこもった声に出鼻をくじかれた。

「いやだねえ、万引きだってさ」

そう言われてみれば、追っていた店員の男はたしかに、「つかまえてくれ」と叫んでいた気がする。だが清瀬の耳は、その言葉を意味のある音として認識できていなかった。

力強く、機械のように脚を繰りだす若い男の走りに、すっかり目を奪われていたせいで。

「いやだねえ、万引きだってさ」

清瀬は左官屋からハンドルを奪うようにして、自転車をもぎ取った。

「借ります」

呆気にとられた左官屋をその場に残し、清瀬は全力で立ち消ぎをして、闇に消えた若

い男の痕跡を追った。

清瀬は左官屋からハンドルを奪うようにして、自転車をもぎ取った。

あいつだ。俺がずっと探していたのは、あいつなんだ。

清瀬の心に、暗い火口で蠢ぐママのような確信の火が灯った。見失うはずがない。

細い道のうえで、あの男の走った軌跡だけが光っている。夜空をよぎる天の川のように、虫を誘う甘い花の香りのように、たなびいて清瀬の行くべき道を示す。

風を受け、清瀬のドテラが大きくふくらんだ。走る男を、自転車のライトがようやく照らしだす。清瀬がベダルを踏むたびに、白い光の輪が男の背で左右に揺れる。

バランスがいい。興奮を必死に抑え、清瀬は男の走りを観察した。背筋に一本のまっすぐな軸が通っているみたいだ。膝から下がよくのびる。無駄な強張りのない肩と、着地の衝撃を受け止める柔軟な足首。軽くしなやかなのに、力強い走りだ。

清瀬の気配を感じたらしく、街灯の下で男がわざわざ振り返った。夜に浮かびあがるその横顔を見て、清瀬は「ああ」と小さく声を漏らした。

喜びなのか恐れなのか、自分でもわからない感情が胸に渦巻く。なにかがはじまる

としていることだけが、はっきりと予感できた。

自転車を加速させ、走る男の横についた。遠くにいるなにものかに操られるように。自分のなかの深い深い場所からの呼び声に突き動かされるよう。問いかけは清瀬の意志とは無関係に、気がつくと口から発せられていた。

「走るの好きか？」

男は急に足を止めて立ちすくみ、困っているとも怒っているともつかぬ表情を清瀬に向けた。激しい情熱を秘めてどこまでも黒い目が、純粹な光を宿してまっすぐに問い返してくれる。

「あんたはどうなんだ。そんな質問に答えられるのか、と。」

その瞬間、清瀬は悟った。もしもこの世に、幸福や美や善なるものがあるとしたら。

俺にとてそれは、この男の形をしているのだ。

清瀬を撃った確信の光は、そのあともずっと、心の内を照らしつづけた。暗い風の海上に投げかけられる灯台の明かりのように。一条の光は、絶えず清瀬の行く道を示しつづけた。

変わることなく、ずっと。

一、竹青荘の住人たち

足先から伝わる衝撃を、全身の筋肉がしなやかに受け流す。耳もとで風が鳴っている。

皮膚のすぐ下が熱い。なにも考えなくても、走の心臓は血液を巡らせ、肺は乱れなく酸素を取りこむ。体はどんどん軽くなっていく。どこまでだって走っていても、笑った。

必要に応じて獲物に襲いかかる獣だ。

走の世界は単純で危なかった。走る。走るためのエネルギーを摂取する。ほとんどそれだけで、あとは言葉にならず、形にならないものが、たどもやもやとしたゆたつているばかりだ。しかし時折、もやもやとしたもののなかから、だれかがなにかを叫ぶ声が聞こえる。

快調に夜の道を走りながら、走はこの一年近く、何度も何度も脳裏に蘇ってくる映像をじっと見つめていた。視界が真っ赤に染まるほどの激情。思いきり振りかぶって止まらなかつた拳。

もしかして、これが後悔というものかもしれない、と走は思った。俺のなかから聞こえてくる叫びは、俺が自分自身をなじっている声なんだ。

たまらなくなつて、走は周囲に視線をさまよわせた。道に覆いかぶさるように立つ木々は、細い枝を空に張り巡らしている。そろそろ芽吹きのときを迎えていたが、柔らかな緑はまだどこにも見つけられない。枝の先に、またたく星がひとつ引っかかっていた。菓子パンの空き袋が、ポケットのなかで枯れ葉を踏みしめるような音を立てる。

走はふと自分以外のものの気配を感じ、背筋を緊張させた。

追つてくる。たしかにだれかが追つてきている。錆びた金属の軋む音が、背後に迫りつつある。たとえ耳を塞いでいたとしても、この感覚は皮膚を通して伝わるはずだ。大会で何度も味わった。地面を揺らす自分以外の生き物のリズム。呼吸音。風のにおいが

変わること。

ひさしく覚えなかつた高揚が、走の心と体を震わせた。

だがここは、永遠の格闘を描く競技場のトラックではない。走はふいに身を翻し、抜け道に入るため、小学校のある角を曲がった。走りに加速がついていく。捕まるものか。絶対に振り切つてみせる。

このあたりの道は入り組んで、私道なのか公道なのかわからぬくらいにどれも狭い。そのぶん、あちこちに派生する行き止まりの路地がある。追いつめられないよう、走は巧みに進路を選んだ。闇に塗りつぶされた小学校の窓の下を駆けぬける。この春から通う予定の、私大のキャンパスを横目に見ながら疾走する。

少し大きな通りに行き当たつた。右折して環状八号線方面に向かおうかと一瞬迷つてから、そのまま直進して住宅街を行くことに決めた。

信号に足止めされることなく、通りを渡る。静かな住宅街に、走の足音が響く。だが追跡者もこのあたりの地理を熟知しているらしく、どんどん気配は濃くなつてくる。

走は自分が、走っているのではなく逃げているのだということに改めて気づいた。悔しさが喉までこみあげる。俺はいつだって逃げている。なおさらには脚を止めたくないなつた。ここで止まつたら、逃げていることを認めてしまうような気がした。

ほの白い小さな明かりが、走の足もとを照らした。小刻みに左右に振れる光の源は、いまやぴたりと走の背後につけている。

自転車に乗ってるのか。ようやくそのことに気がついて、走は自分でもあきれてしまつた。軋む金属音をたしかに耳にしていたのに、追跡者が自転車に乗っているという可能性は、まったく考えていないかった。自力でこの距離を走って、走の速度についてからはじめた。鼓動を感じながら呼吸を意識する。まるたは半分閉じたようになって、自分の足もとや前方を見据える。繰りだされる爪先と、黒いアスファルトのうえに描かれた一筋の白線だけを見る。

細い線をたどつて、走は走る。

ゴミは道に捨てないくせに、パンを盗んでも罪悪感が生じない。空腹でひりつく胃をなだめられたことに、満足を覚えるだけだ。

動物みたいだな、俺。走はそう思う。速く長く走るために、毎日トレーニングをして、正確で強靭なフォームを身につけた。腹が減つてどうしようもないから、コンビニエンスストアでパンを盗んだ。これでは獸と変わらない。決まったルートで縄張りを巡回し、

のを着て、ペダルを回転させる足には健康サンダルを履いている。

なんなんだ、いったい。 様子をうかがうために、走は速度を落とした。自転車は古い水車みたいな音を立てながら、ごく自然に走に併走しはじめる。

走は横目で男を盗み見た。さっぱりとした顔立ちのその男は、湯上がりらしく髪が濡れている。自転車のカゴには、洗面器がなぜか二つ入っていた。男も、たびたび走のほうを見る。特に、走っている脚のあたりばかり見る。まさか変質者じゃないだろうなど、なんだか気味が悪くなつた。

自転車に乗ったその男は、少し距離を取り、黙つて走の横についていた。走も相手の出かたをはかりながら、ベースを乱さずに走りつづける。コンビニの店員に頼まれて自分を追つてきたのか、それともまったく無関係なただの通行人なのか。走のなかで不安と緊張と苛立ちが頂点に達しようとしたそのとき、穏やかな声が遠い湖面みたいに耳に届いた。

「走るの好きか？」
走は驚いて足を止めた。目の前の道が忽然と消え、うろたえて断崖の縁にたたずむ人間のように。
走は夜の住宅街の真ん中で立ちすくむ。鼓動が耳の奥で響いていた。かたわらを走っていた自転車が、甲高い音を立ててブレーキをかける。走はのろのろとそちらに顔を向けた。自転車にまたがつた若い男が、じっと走を見ている。それでようやく、最前の問いを発したのが、その若い男であつたことに思い至つた。

「急に止まるな。少し流そう」
そう言って男は、再びゆっくりと自転車を漕ぎだす。どうして見も知らぬあんたについていかないきゃならないんだ、と思ははしたが、なにかに操られるように、走の脚は男のあとを追つていた。
ドテラを羽織つた男の背中を見ながら、走は憤りともあきれともつかない氣持ちがこみあげてくるのを感じた。走ることについての好惡を聞かれるのは、ずいぶんひさしうりだった。

食卓に好物を出されたときのように、「好きだ」と気軽に答える。あるいは不燃物をゴミ捨て場のカゴに投げこむようすげなく、「嫌いだ」と答える。走には、どちらもできそうになかった。そんな質問に答えられるわけがない、と走は思う。たどりついたい場所があるわけでもないのに、毎日毎日走りつづけてしまう。そういう人間のなかに、走るという行為に対する好惡を断言できるものなどいるだろうか。

30

走にとって、走ることが単純に喜びだけでは、橋円に閉じこめられ、ひたすら時の流れの速度に抵抗してあがいた。あの日の爆発的な衝動が、積み重ねてきたすべてを粉々に碎いてしまつまでは。

自転車の男は、徐々に車輪の回転をゆるやかにしていく、やがてシャッターの下りた小さな商店のまえで止まった。走も走るのをやめ、いつもの癖で簡単にストレッチをして筋肉をほぐす。男はのっぴりした光を放つ自動販売機で冷たい茶を買い、ひとつを走に投げてよこした。店のまえの地べたに、どちらからともなく並んでしゃがむ形になつた。走は手のなかにある缶の冷たさが、体内の熱を吸い取つていくのを感じていた。

「いい走りをしている」

しばらくの沈黙のあと、男は言った。「ちょっと失礼」
男はおもむろに、ジーンズに包まれた走のふくらはぎに手をのばす。こいつが変質者でも、もうどうでもいいや。投げやりな気分になり、走は男の手が自分の脚を触るのに

任せた。ひどく喉が渇いていたので、男の買った茶を一息に飲み干す。

男は腫瘍の有無を判じる医者のような手つきで、走の脚についた筋肉を事務的に確認した。そして顔を上げ、真っ向から走を見据える。

「なんで万引きなんかした？」

「……あんなもの？」

「蔽原走……です」

と素直に答えていた。中学生のころから、部活の軍隊並の総社会で暮らしてきたせい

した。 「俺は清瀬灰二」。寛政大学文学部四年

走が入学する大学だった。走は半ば無意識に、

「四月から俺も寛政大に通うんで」

10
10

走はさつさと立ちあがる。走は、いきなり走を呼び捨てにした。「このへんに住んでるのか？」

「いい名前だな。走は」

と、清瀬灰二と名乗つた男は、いきなり走を呼び捨てにする。

「……社会学部」「へえ！」

「なんで万引きなんかした？」

清瀬の目が異様な輝きを帯びたことに、走はたじろがずにはいられなかつた。自転車で追いかけてきて、いきなり見ず知らずの人間の脚に触る男。やはりまともではないのだ。

「じゃ、俺はこれで。お茶、ごちそうさまでした」

走はそのままに立たちあがる。走は、清瀬がそれを許さなかつた。走のシャツの裾を引つ張り、強引にものとのおり隣に座らせようとする。

「学部は？」

「……社会学部」「へえ！」

「なんで万引きなんかした？」

話は発射地点に戻り、走は地球の重力の呪縛から逃れられない宇宙飛行士のように、よろよろと再びしゃがみこんだ。

「ホントにあんた、なんなんですか？ 俺を脅そうっての？」

「そうじゃない。きみが困つてゐるのなら、なにか力になれないかと思ってね」

走はますます警戒の度合いを深めた。清瀬には絶対に裏がある。ただの好意で、こんなことを言いだすはずがない。

「後輩だとわかつたからには、捨て置けないだろう。……金かい？」

「ええ、まあ」

貸してくれるのかと走は期待したが、実際にいま清瀬が持つてゐるものといつたら、質問だけをつづけた。

「親御さんからの仕送りは？」

「アパートの契約金にて渡された金、全部麻雀に使つちゃつて。来月分の生活費が振り込まれるまでは、しょうがないから大学で野宿です」

「野宿」

清瀬は身を乗りだし、走の脚のあたりにじっと視線を注ぎながら、なにか考えこみはじめた。走は居心地が悪くなつて、スニーカーのなかで足の指先を動かした。

「それは大変だな」

やがて清瀬は、真摯な口ぶりで言った。「よかつたら、俺が住んでいるアパートを紹介しよう。ちょうど一部屋空きがある。竹青荘といって、この近くだ。大学にも徒步五

分だし、家賃は三万円」

40

20

30

「三万円？」

走は思わず声を上げてしまった。その破格の家賃には、いったいどんな秘密が隠されているのだろう。毎晩血の滲みだす押入や、暗いアパートの廊下を徘徊する白い影を想像し、身震いする。計器を使って数値化できる速度の世界に身を置き、走ることに適した肉体を日々丹念に作りあげることに喜びを見いだしてきた走は、幽霊や怪奇現象といった、とらえどころのない境界に属するものが苦手だった。

だが、清瀬は走の悲痛な声を、麻雀で無一文になったものの嘆きととらえたらしかつた。

「大丈夫だ。大家さんに頼めば、家賃は待ってくれる。竹青荘は、敷金礼金もいっさいないから」

独り決めして空き缶を捨て、立ってもう自転車のスタンドを蹴りあげている。この得体の知れない男の住む竹青荘に、走はますます疑惑を抱いた。だが清瀬は、

「さあ、早く。案内する」

と急ぎ立てる。「そのまえに、走の荷物を取りにいかないとな。大学のどこで野宿してたんだ？」

体育馆の脇だ。コンクリートの外階段の陰に隠れるようにして、風雨をしのいでいた。走が郷里から持ってきた荷物は、スポーツバッグひとつにすべて収められる量だった。必要なものがあれば、あとで家から送ってもらえばいいと思った。走は住む部屋を決めもせず、ふらりと自分の家を出て、東京に来たのだ。着いたその日の夜から雀荘に行き、すっからかんになった。

それでも、不安や恐れは感じなかった。知りあいのいない場所で、一人で過ごすのは苦ではない。むしろ解放感を覚えたほどだ。だがたしかに、入学式までには住処を決めたいところだ。たし、ジョギングのついでにコンビニで万引きするような暮らしにはうんざりだった。

おとなしく立ちあがった走を見て、清瀬は満足そうにうなずいた。自転車にまたがることはせず、絡まり気味のチャーンの音も高く、ハンドルを引いて歩いていく。清瀬の羽織るほつれたドテラを、街灯が白々と照らした。

おかしなことに、清瀬はあれほど走の走りに注目していたようだったのに、「陸上経験者か」などとは聞いてこなかつた。もう万引きするなよ、とも言ひはしなかつた。走は思いつつ、先を行く清瀬に声をかけた。

「清瀬さん、どうして俺に親切にしてくれるんです」

清瀬は振り返り、アスファルトの隙間から緑の雑草が芽吹いているのを見つけたひとのように、ひそりとした笑みを浮かべた。

「俺のことは、ハイジと呼んでくれてい」

走は観念し、自転車を引く清瀬の隣に並んだ。どんな安アパートでも、どんなに住人が風変わりでも、野宿よりはましだろう。